

イ 小児科定点

(ア) R S ウイルス感染症

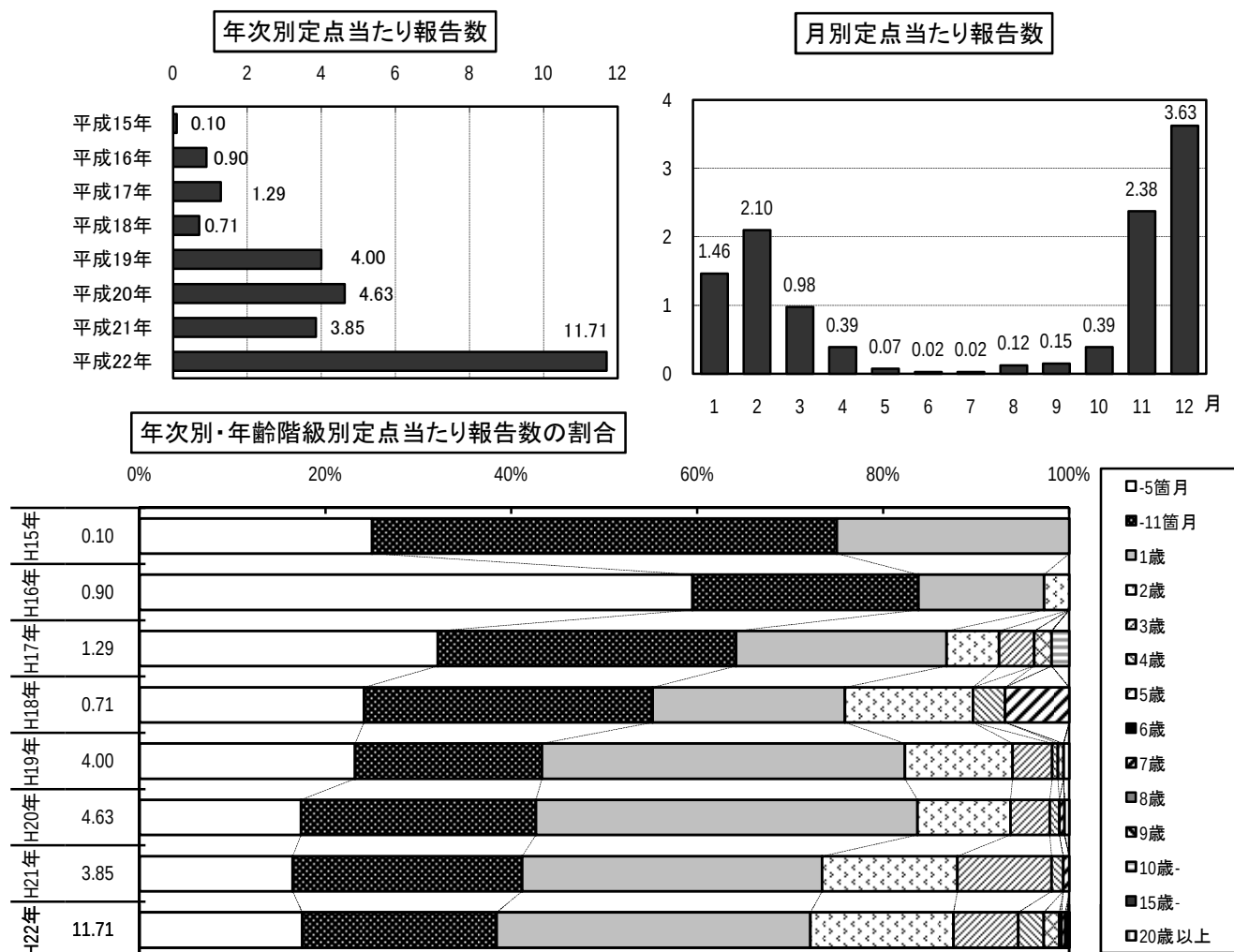
R S ウイルス感染症は、平成 15 年 11 月から感染症発生動向調査事業の定点把握対象五類感染症に追加され、小児科定点から報告されることとなった。

平成 22 年の年間報告数は 474 例、年間定点当たり報告数は 11.71、年間定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 4.04、前年比 3.04 であった。年間定点当たり報告数は、調査開始の平成 15 年以降、最も多かった。

月別定点当たり報告数は、12 月 (3.63)、11 月 (2.38)、2 月 (2.10) の順に多く、冬季に多かった。特に 11 月以降、過去 5 年平均値を大きく上回った。

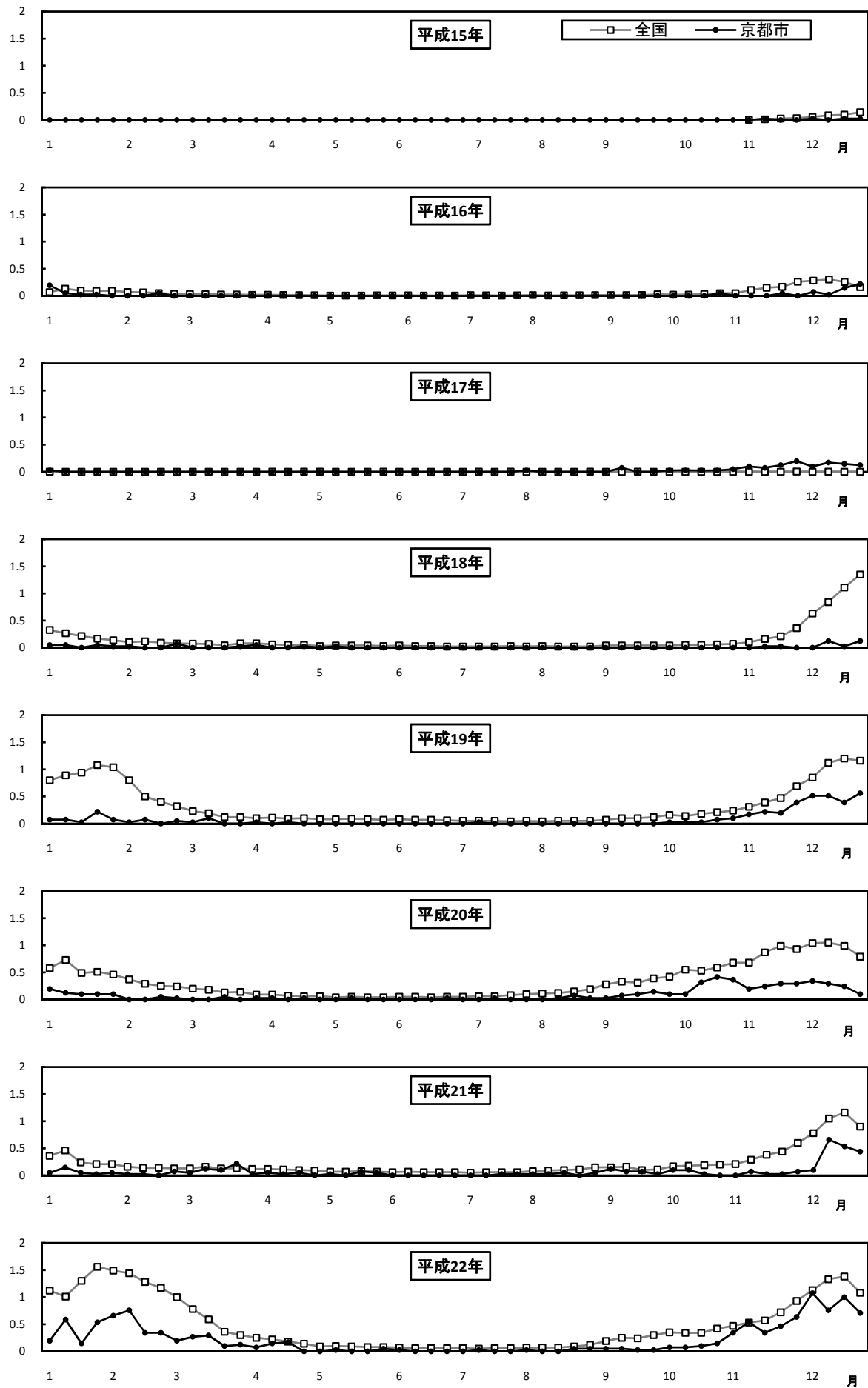
年齢階級別割合が高かったのは、0 歳 (38.4%)、1 歳 (33.8%) で、2 歳以下が 87.6% を占めた。

詳細は、[患者情報 1](#) (平成 22 年トピックス)「(1) ウ 平成 22 年 R S ウイルス感染症のまとめ」を参照。



RSウイルス感染症

週別定点当たり報告数の推移



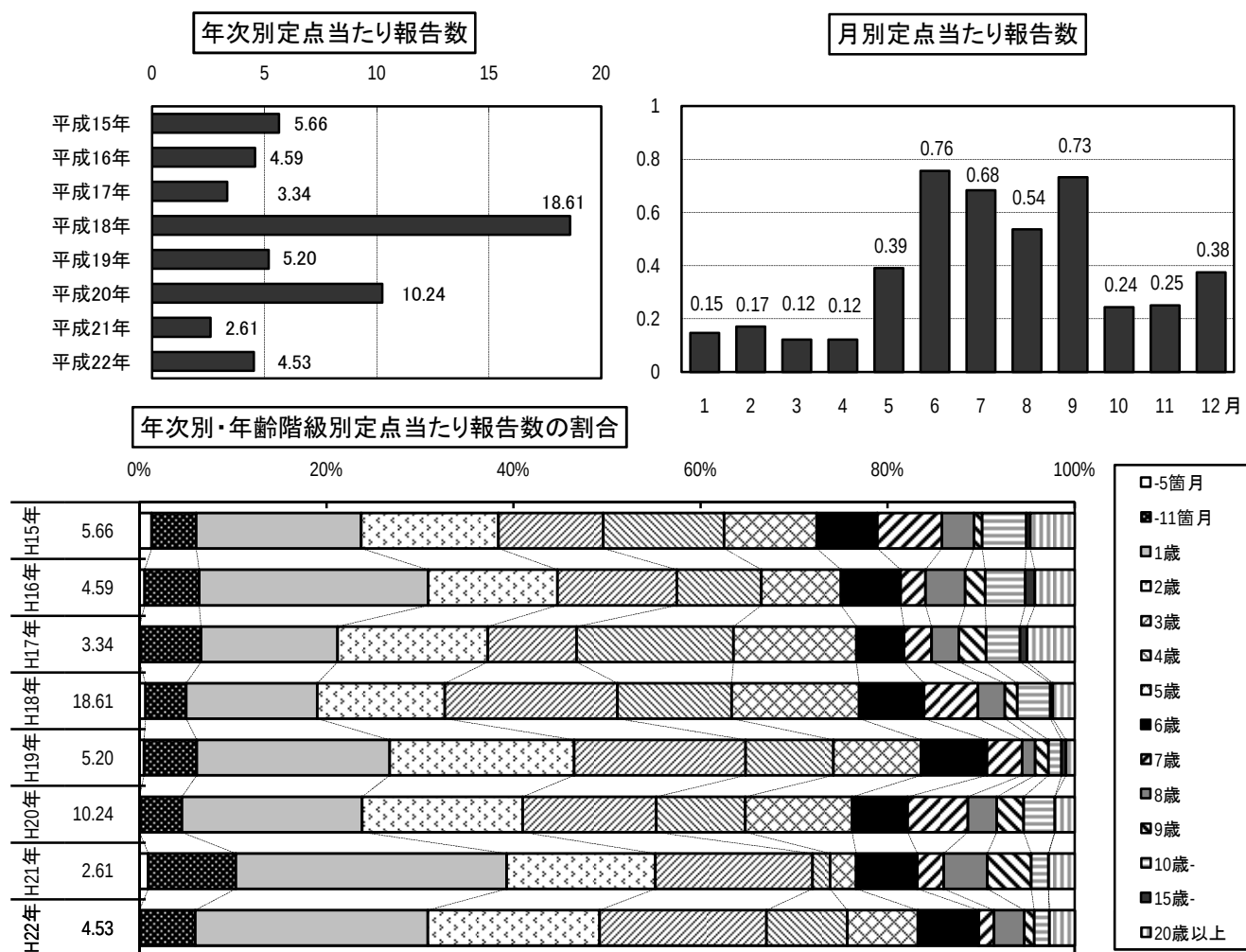
(イ) 咽頭結膜熱

平成 22 年の年間報告数は 185 例，定点当たり報告数は 4.53，定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 0.57，前年比は 1.73 であった。

過去7年間の年間定点当たり報告数(2.61～18.61)と比べると、平成21年、平成17年に次いで少なかった。

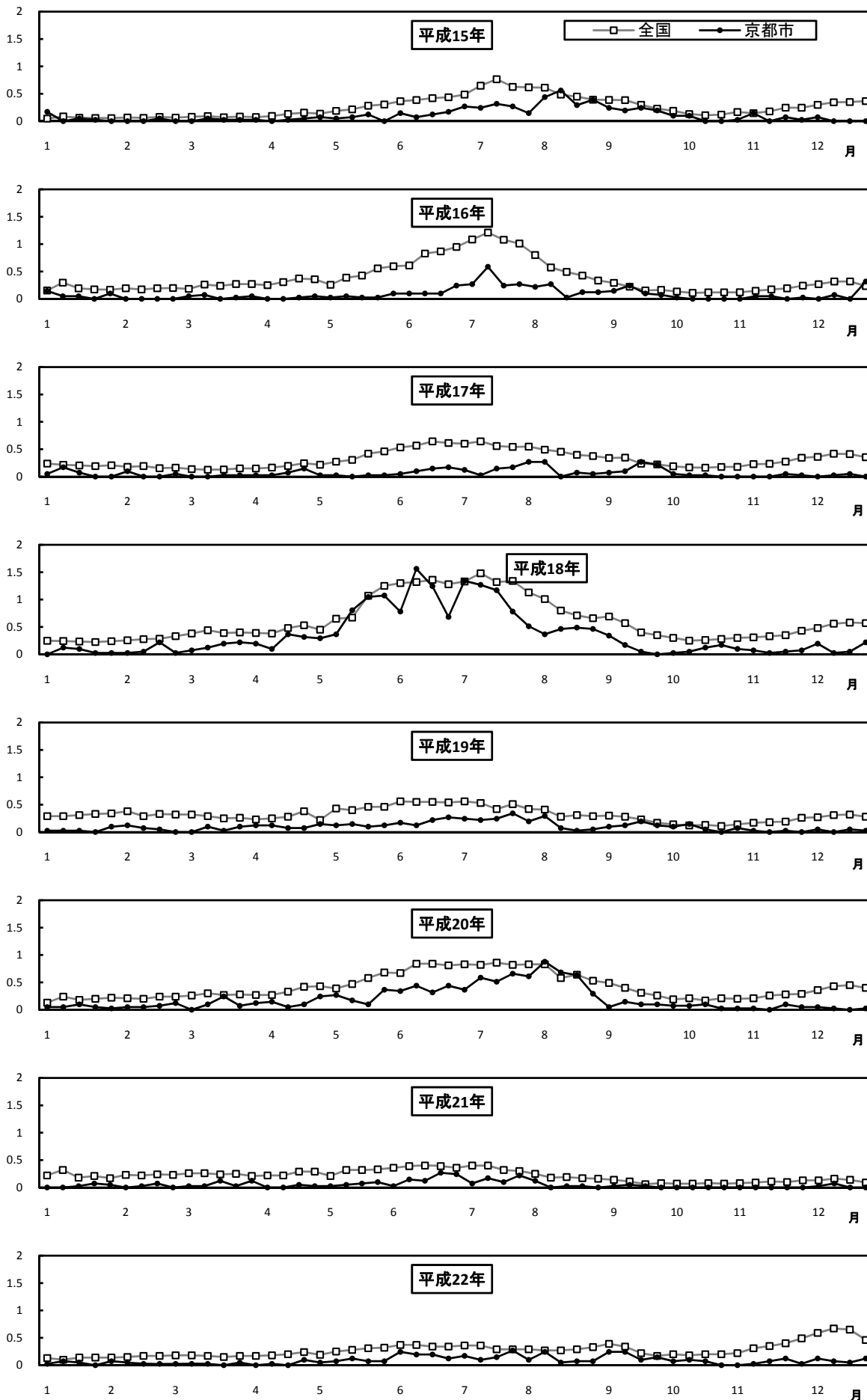
月別定点当たり報告数は、6月(0.76)、9月(0.73)の順で、夏季に多かった。全国では、12月に最も多かった。

年齢階級別割合が高かったのは、1歳(24.9%)、2歳(18.4%)、3歳(17.8%)の順で、1～3歳が61.1%を占めた。



咽頭結膜熱

週別定点当たり報告数の推移



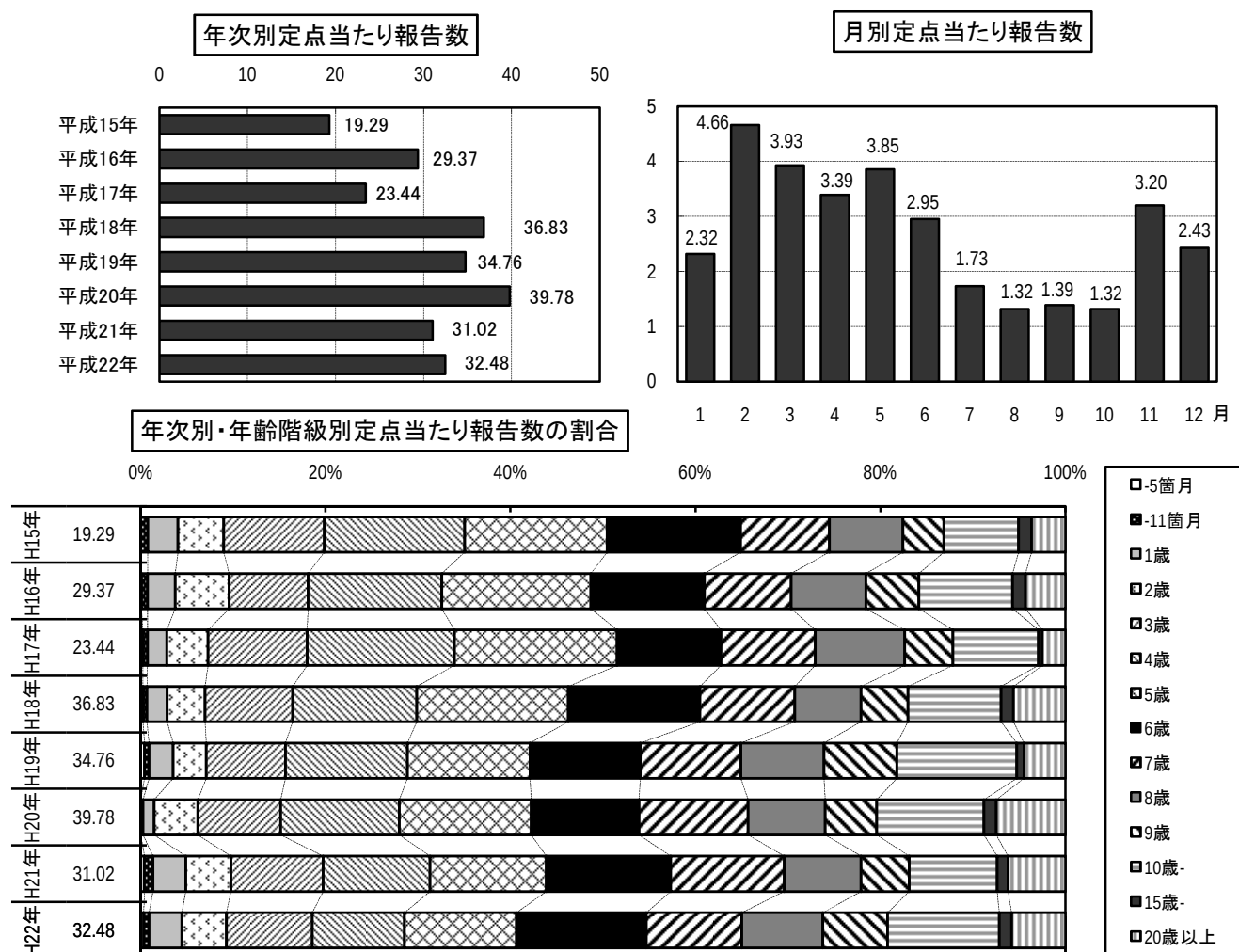
(ウ) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

平成 22 年の年間報告数は 1,326 例、定点当たり報告数は 32.48、定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 0.98、前年比は 1.05 であった。

過去7年間の年間定点当たり報告数(19.29～39.78)と比べると、平成20年、平成18年、平成19年に次いで多かった。

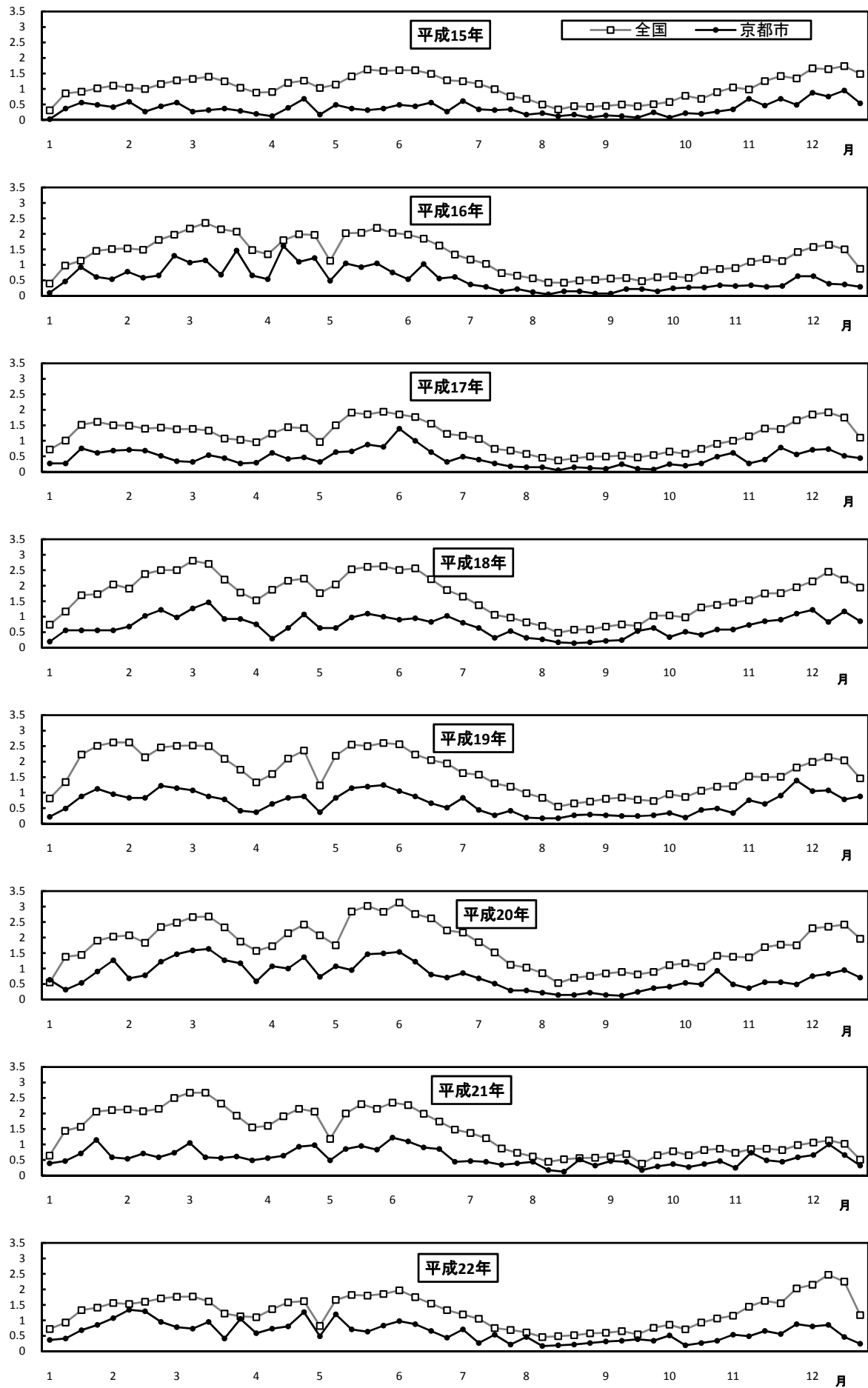
月別定点当たり報告数は、1月～6月、11月～12月が多く、2月(4.66)が最も多かった。

年齢階級別割合が高かったのは、6歳（14.0%）、5歳（12.1%）の順で、3～8歳が64.5%を占めた。10歳以上は、19.2%であった。



A群溶血性 レンサ球菌咽頭炎

週別定点当たり報告数の推移



(エ) 感染性胃腸炎

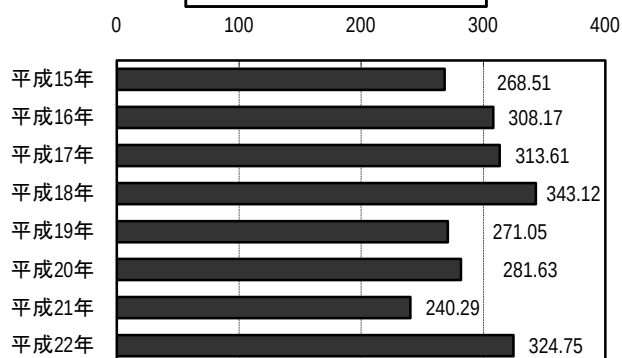
平成 22 年の年間報告数は 13,232 例、定点当たり報告数は 324.75、定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 1.12、前年比は 1.35 であった。

過去 7 年間の年間定点当たり報告数（240.29～343.12）と比べると、平成 18 年に次いで多かった。

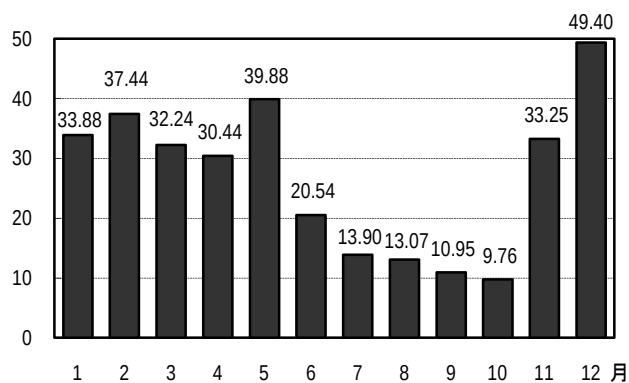
月別定点当たり報告数は、12 月（49.40）、5 月（39.88）、2 月（37.44）、1 月（33.88）の順に多く、7 月～10 月の報告数は少なかった。

年齢階級別割合が高かったのは、1 歳（15.8%）、2 歳（11.4%）、3 歳（9.8%）の順で、5 歳以下が 61.1%を占めた。10 歳以上は、21.6%であった。

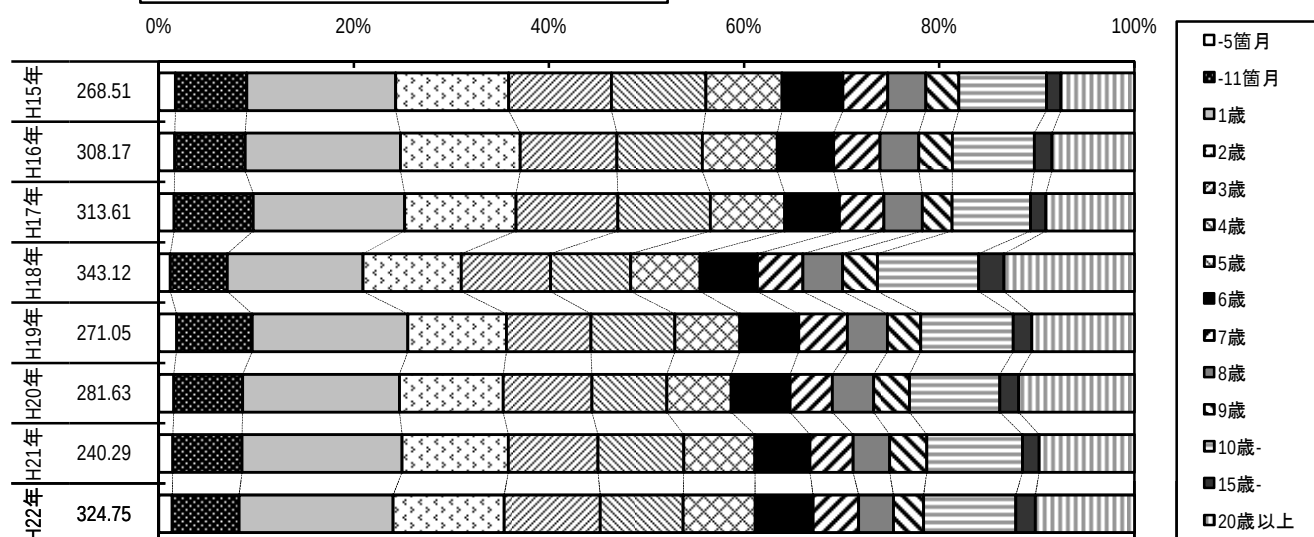
年次別定点当たり報告数



月別定点当たり報告数

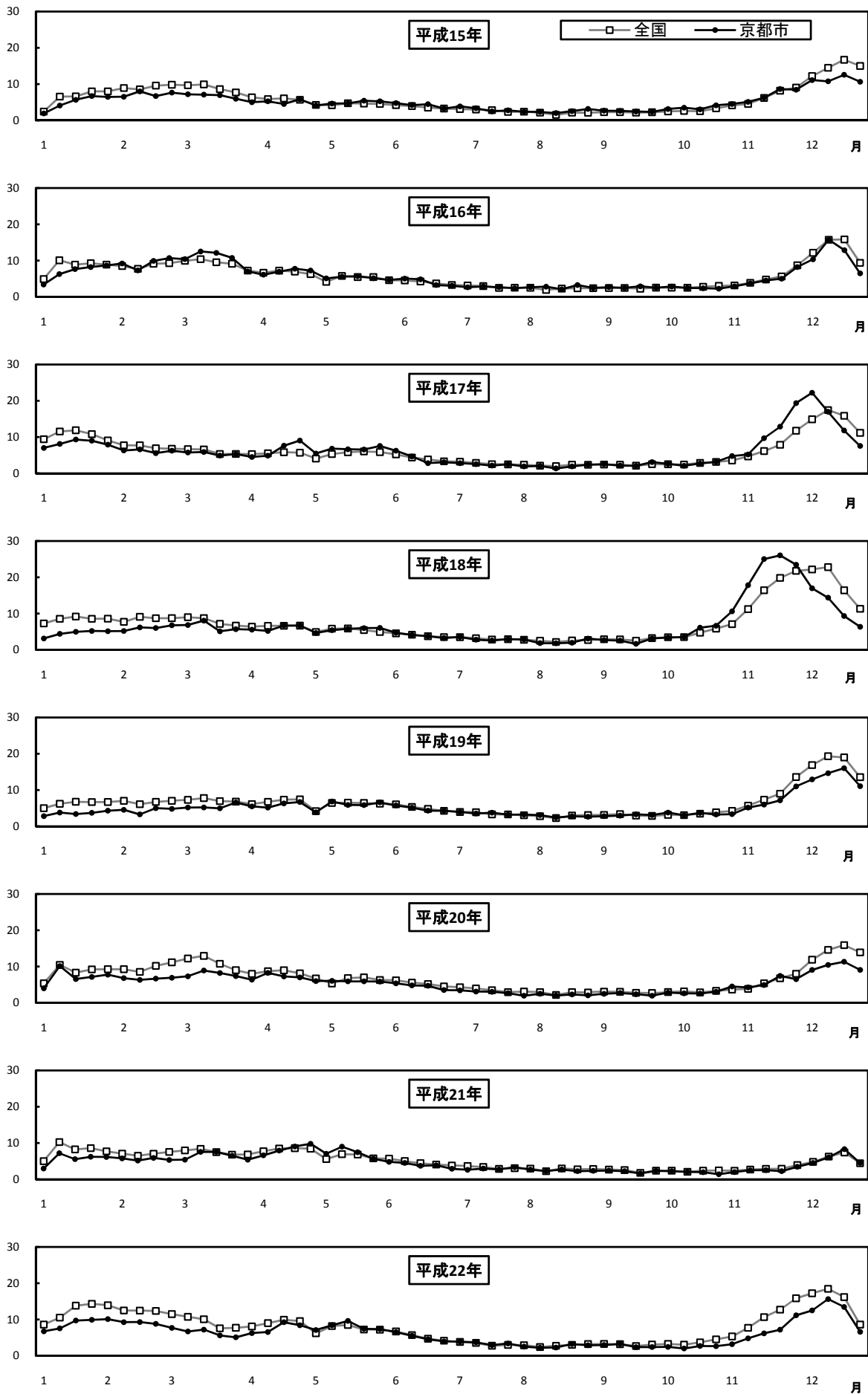


年次別・年齢階級別定点当たり報告数の割合



感染性胃腸炎

週別定点当たり報告数の推移



(オ) 水痘

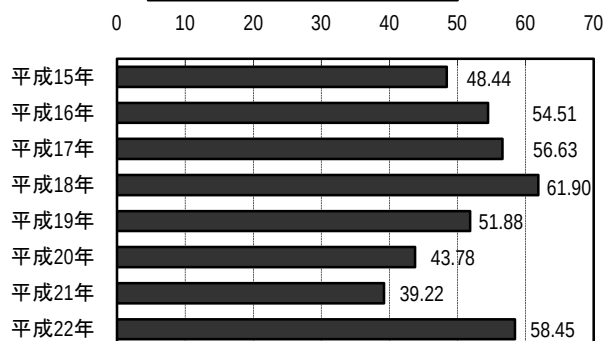
平成 22 年の年間報告数は 2,385 例、定点当たり報告数は 58.45、定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 1.15、前年比は 1.49 であった。

過去 7 年間の年間定点当たり報告数（39.22～61.90）と比べると、平成 18 年に次いで多かった。

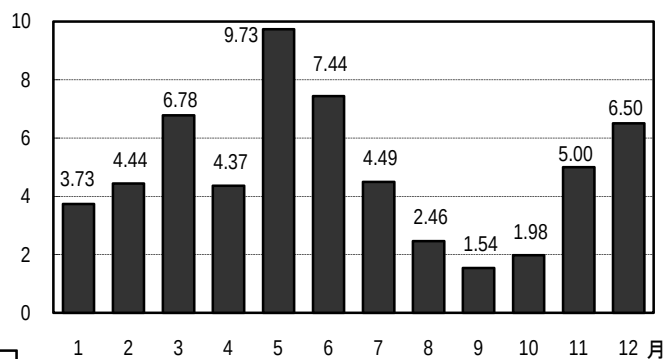
月別定点当たり報告数は、5 月（9.73）が最も多く、次いで 6 月（7.44）、3 月（6.78）の順で、9 月を底に 8～10 月の報告数が少なかった。

年齢階級別割合が高かったのは、2 歳（21.8%）、1 歳（21.7%）、3 歳（16.1%）、4 歳（14.3%）の順で、1～4 歳が 73.8%を占めた。

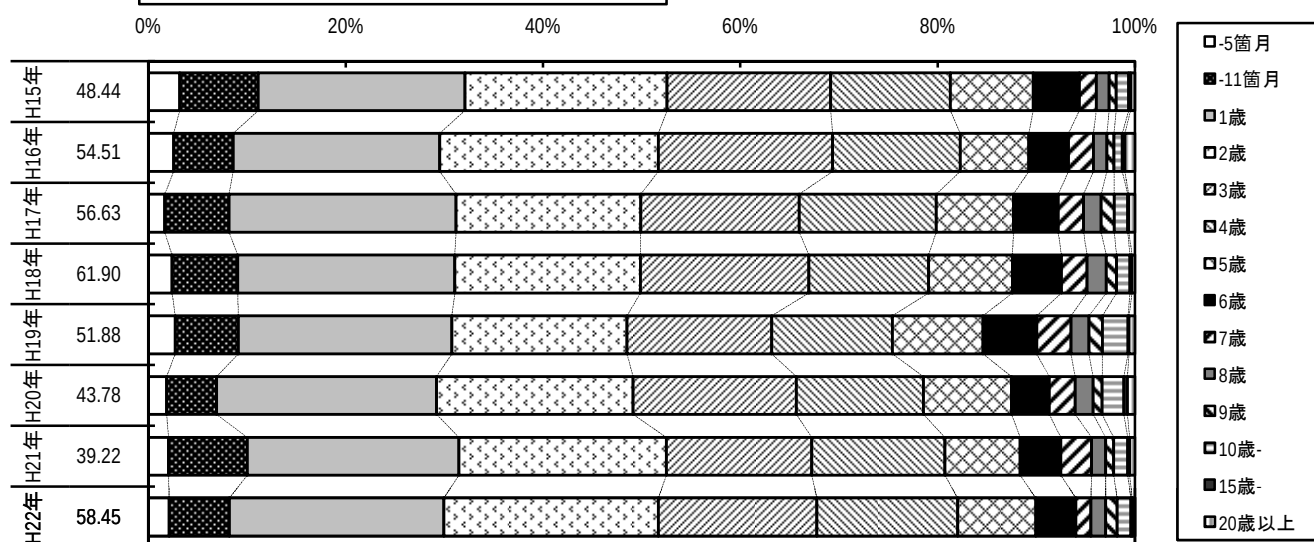
年次別定点当たり報告数



月別定点当たり報告数

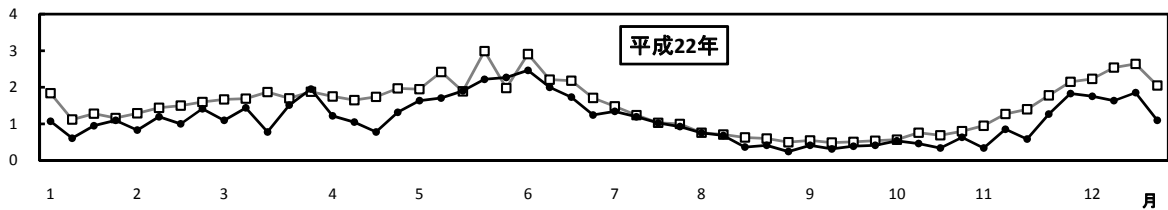
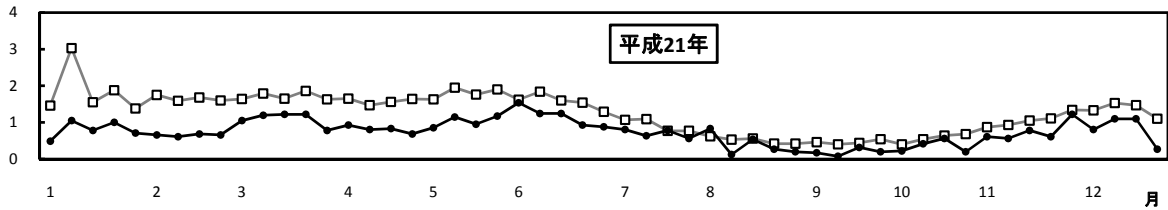
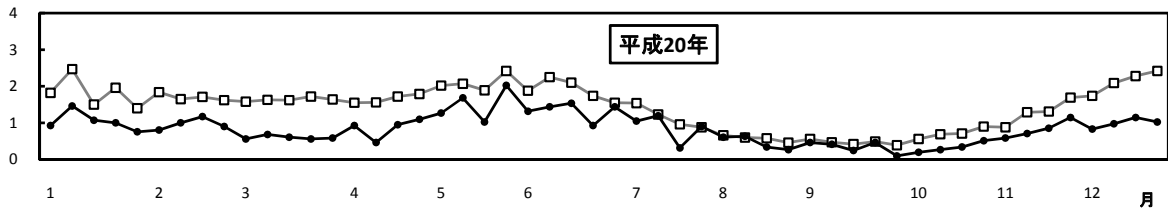
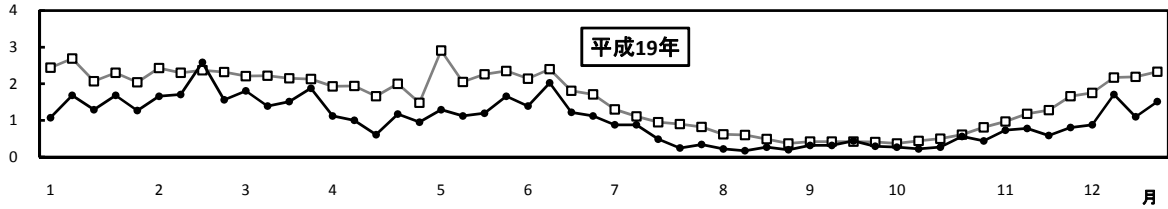
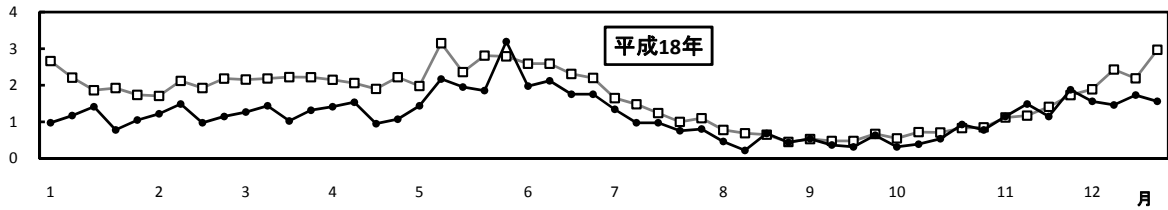
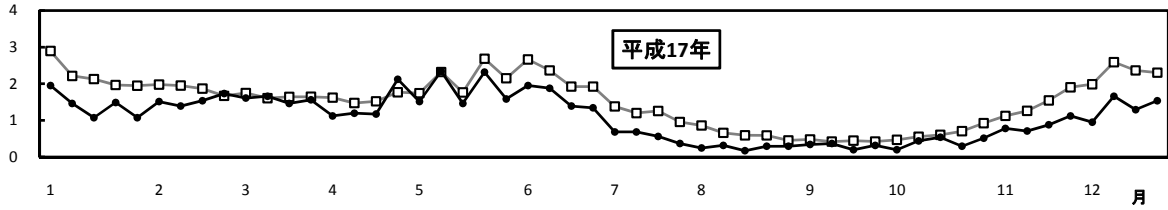
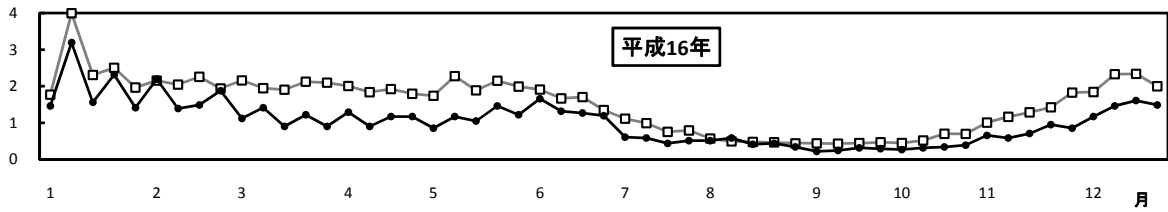
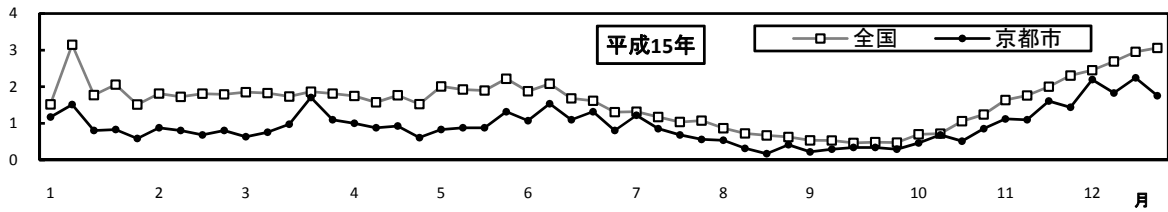


年次別・年齢階級別定点当たり報告数の割合



水痘

週別定点当たり報告数の推移



(カ) 手足口病

平成 22 年の年間報告数は 1,618 例、定点当たり報告数は 39.47、定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 2.07、前年比は 3.15 であった。

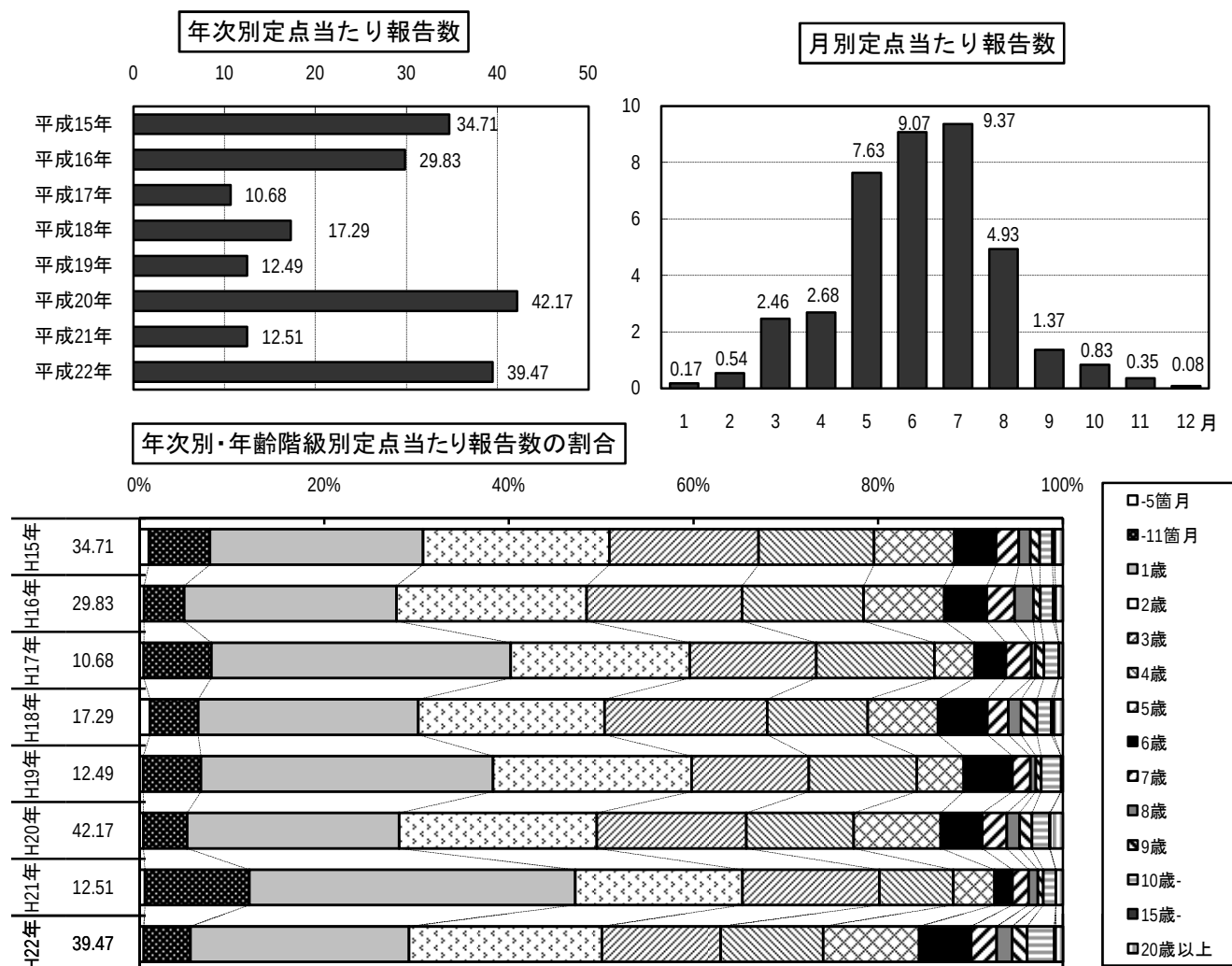
過去 7 年間の年間定点当たり報告数（10.68～42.17）と比べると、平成 20 年に次いで多かった。

月別定点当たり報告数は、7 月（9.37）が最も多く、次いで 6 月（9.07）、5 月（7.63）の順であった。

週別定点当たり報告数のピークは、第 27 週（7 月）で、過去 5 年平均値のピークが第 29 週（7 月）であるのに比べ、少し早めであった。

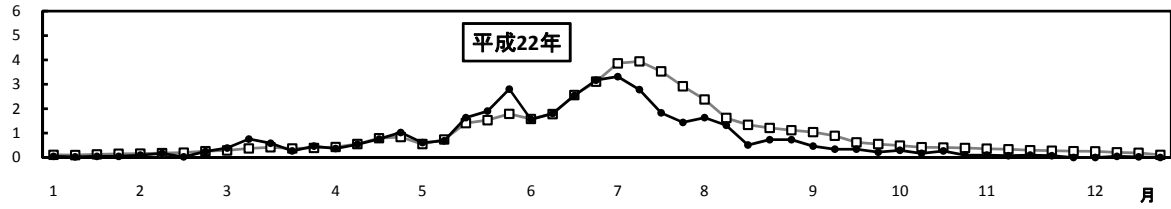
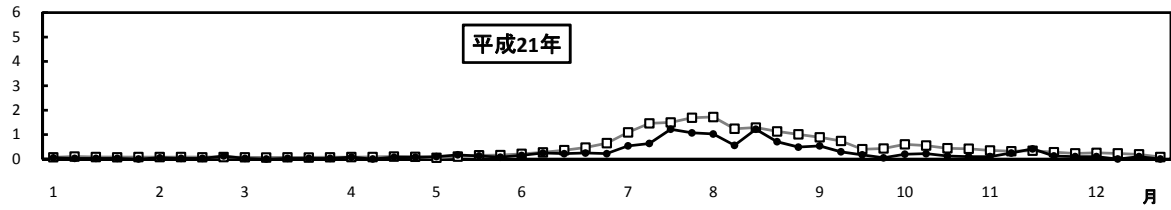
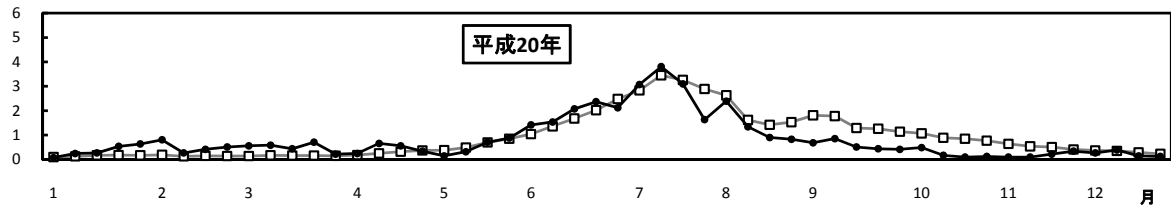
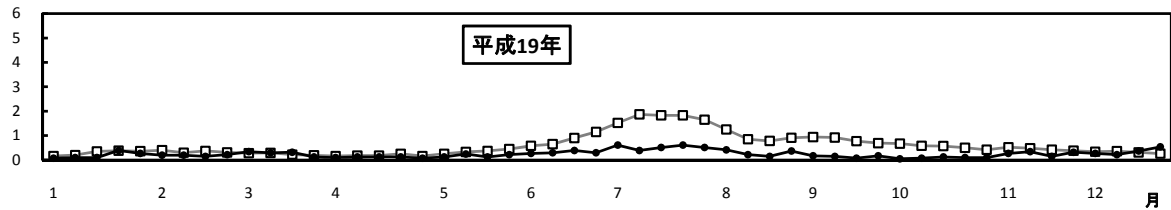
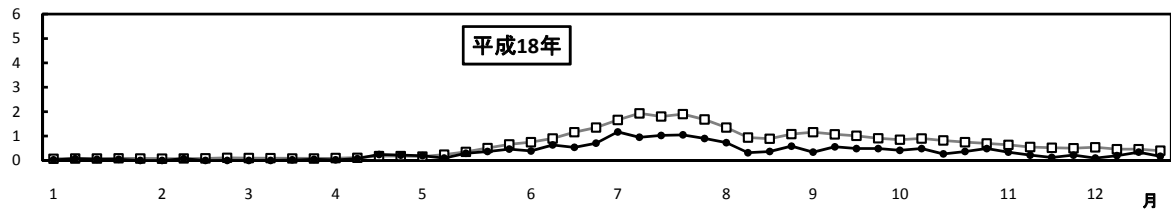
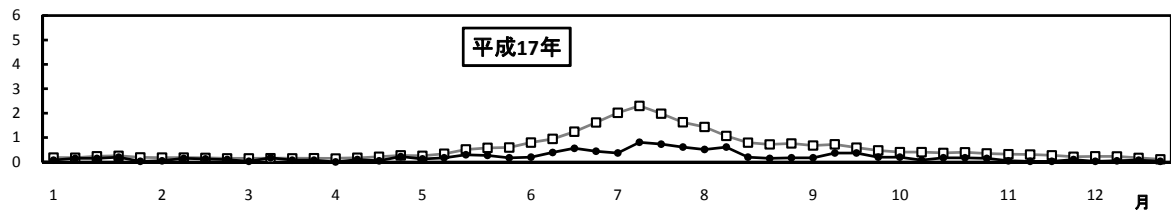
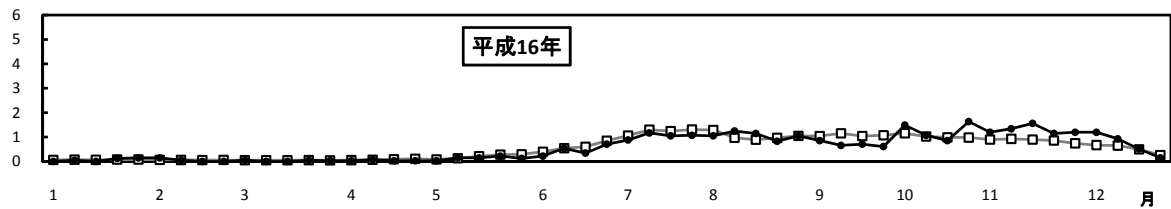
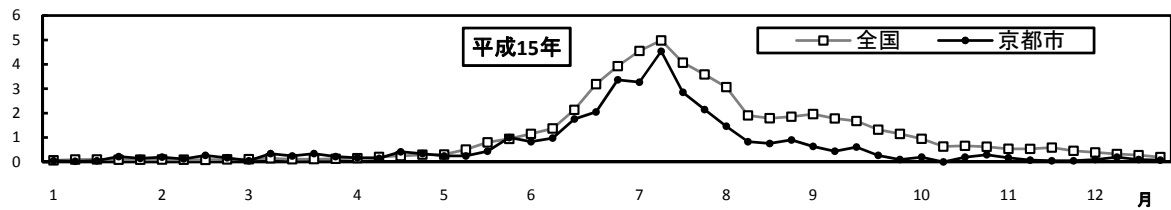
年齢階級別割合が高かったのは、1 歳 23.7%、2 歳 20.9%、3 歳 12.9%の順で、1～5 歳が 78.9%を占めた。

詳細は、[患者情報 1](#)（平成 22 年トピックス）「(1) エ 平成 22 年手足口病のまとめ」を参照。



手足口病

週別定点当たり報告数の推移



(キ) 伝染性紅斑

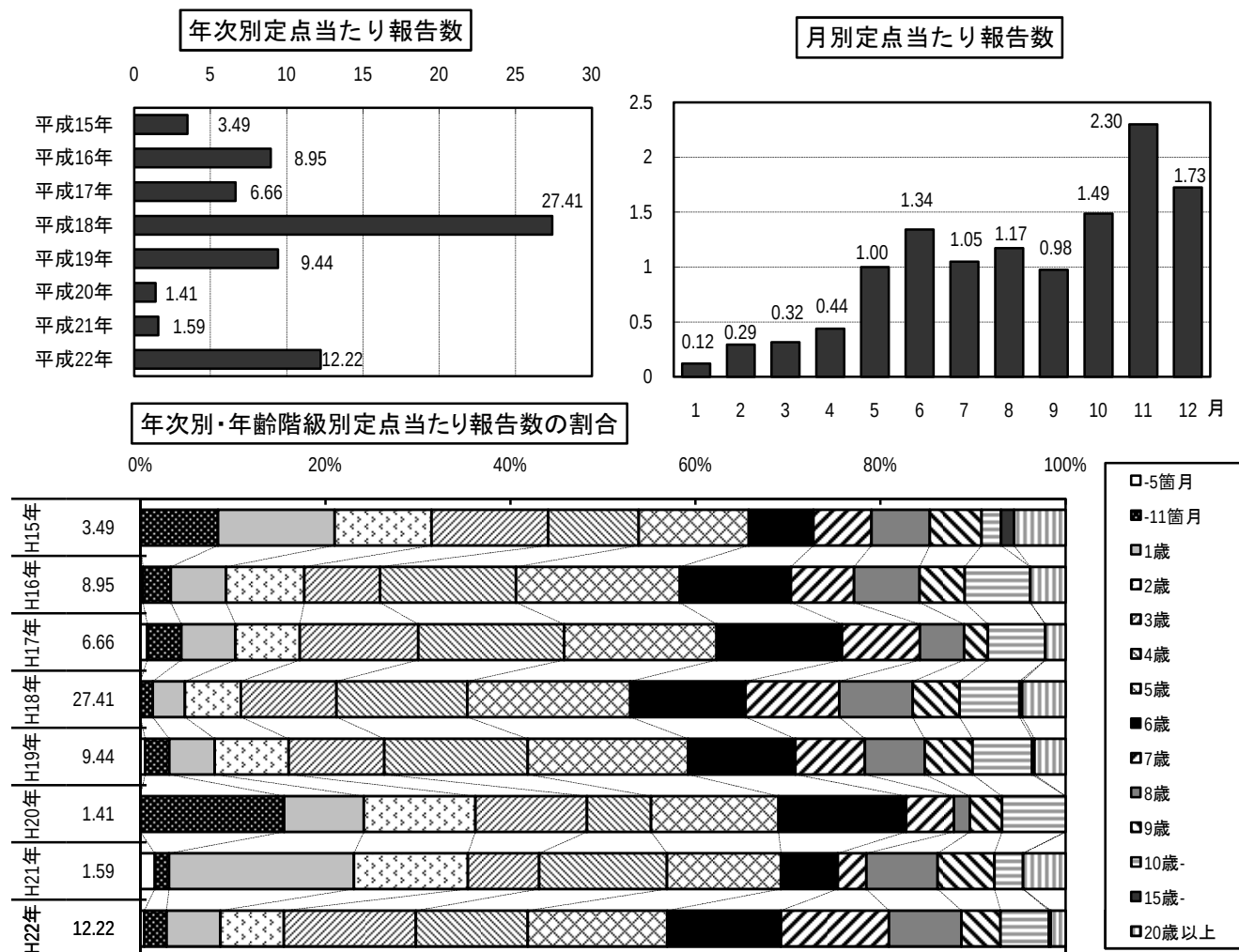
平成 22 年の年間報告数は 497 例，定点当たり報告数は 12.22，定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 1.31，前年比は 7.71 であった。

過去 7 年間の年間定点当たり報告数（1.41～27.41）と比べると，平成 18 年に次いで多かった。伝染性紅斑は，数年おきに流行がみられ，平成 22 年は流行の年となった。

月別定点当たり報告数は，5 月以降増加し，11 月（2.30）が最も多かった。

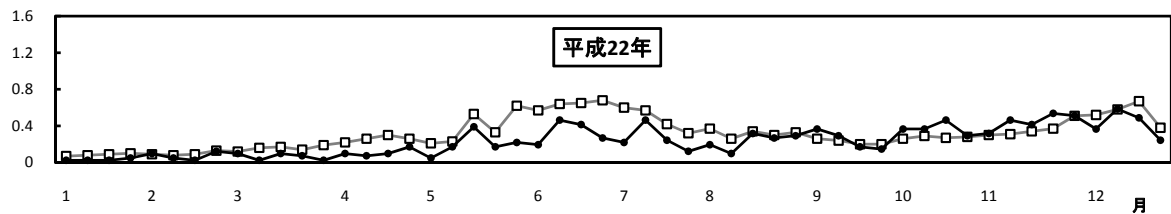
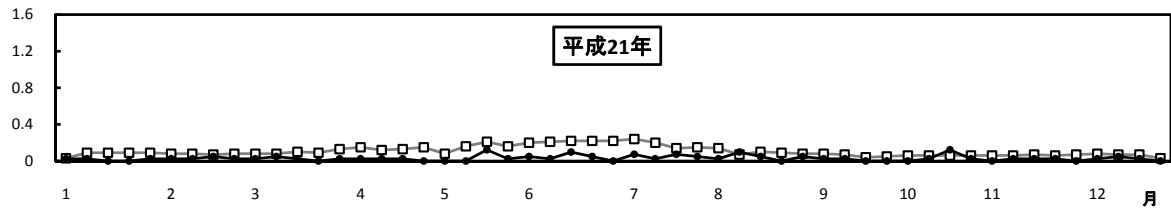
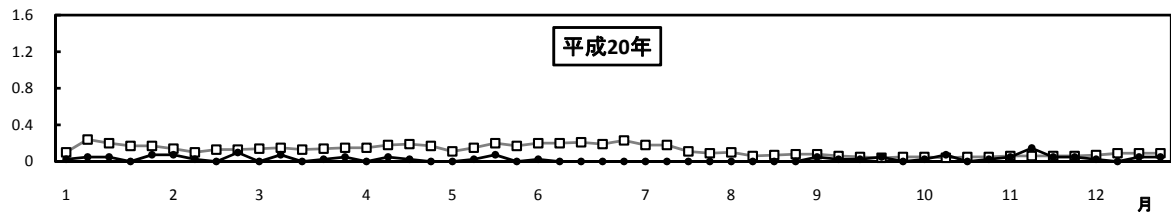
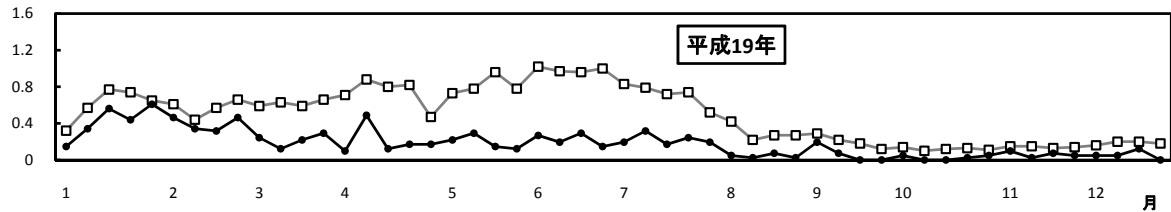
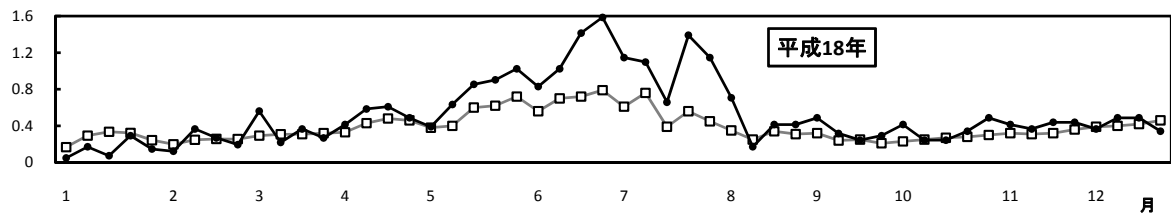
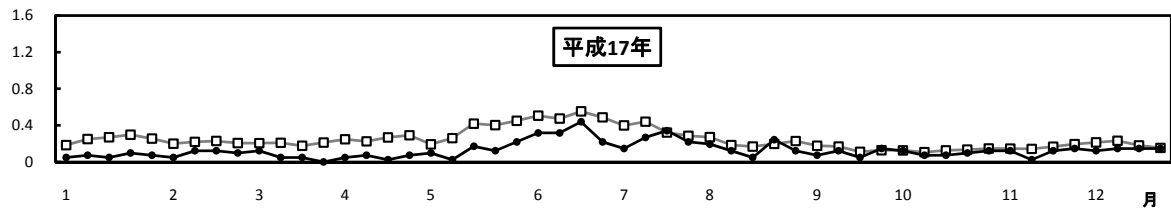
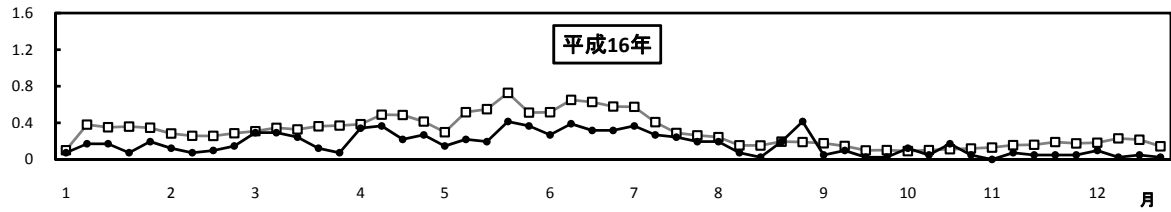
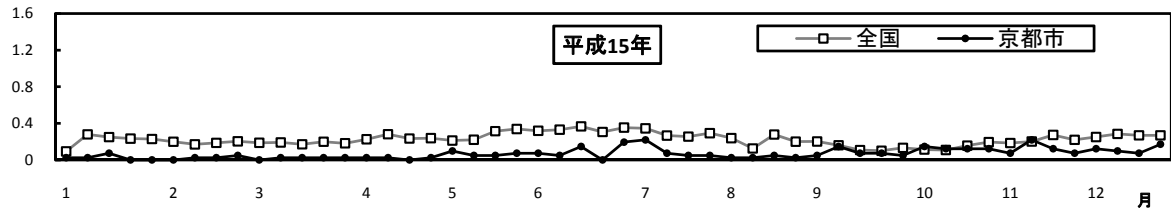
年齢階級別割合が高かったのは，5 歳（15.1%），3 歳（14.3%），6 歳（12.3%），4 歳（12.1%）の順で，3～7 歳が 65.4%を占めた。

詳細は，[患者情報 1](#)（平成 22 年トピックス）「(1) オ 平成 22 年伝染性紅斑と流行性耳下腺炎のまとめ」を参照。



伝染性紅斑

週別定点当たり報告数の推移



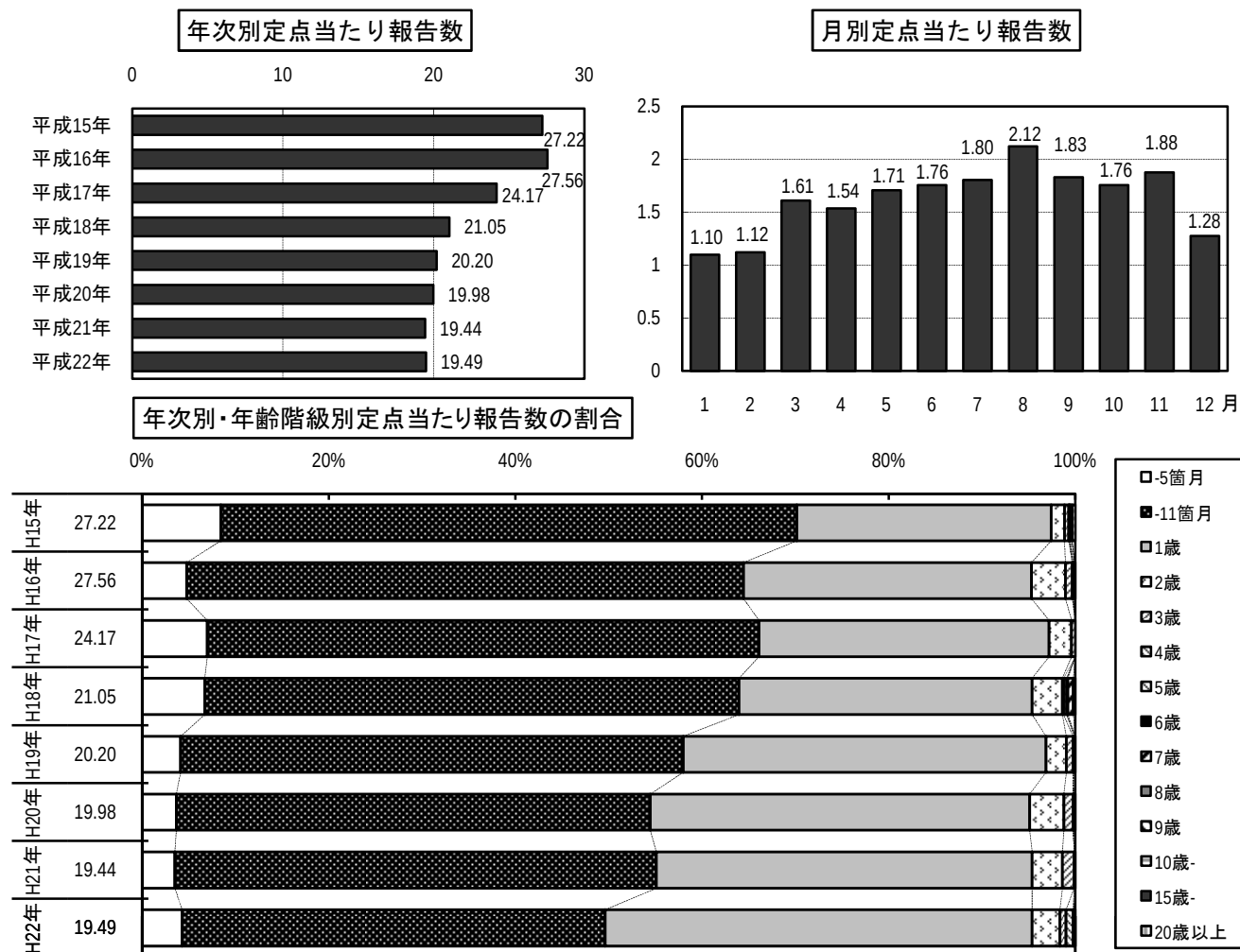
(ク) 突発性発しん

平成 22 年の年間報告数は 796 例、定点当たり報告数は 19.49、定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 0.93、前年比は 0.999 であった。

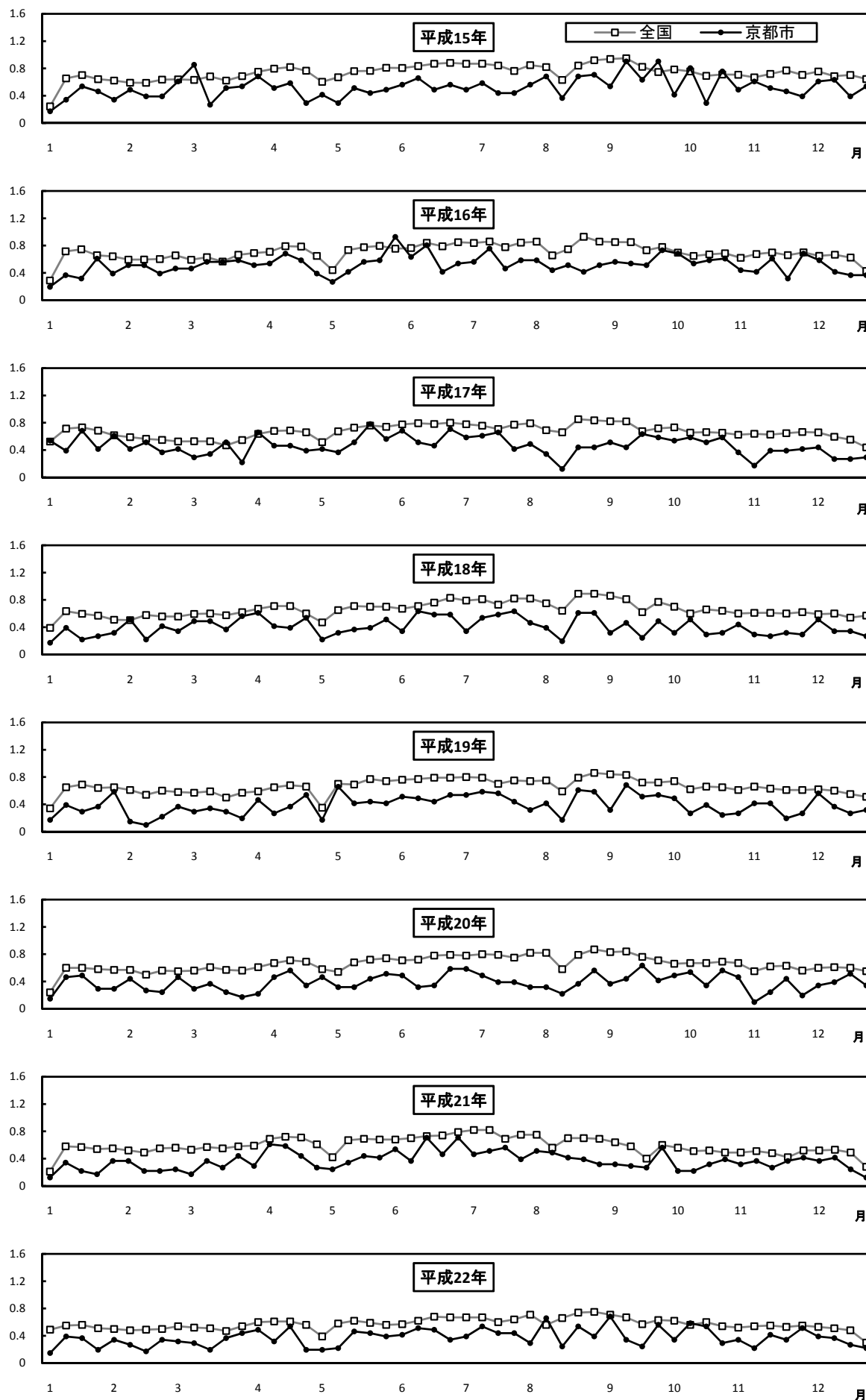
過去7年間の年間定点当たり報告数（19.44～27.56）に比べると、平成21年に次いで少なかった。

突発性発しんは、通年性の感染症で、季節変動はあまりない。

年齢階級別割合が高かったのは、6～11 箇月（45.4%）、1 歳（45.7%）の順で、6 箇月～1 歳が 91.1%を占めた。



週別定点当たり報告数の推移



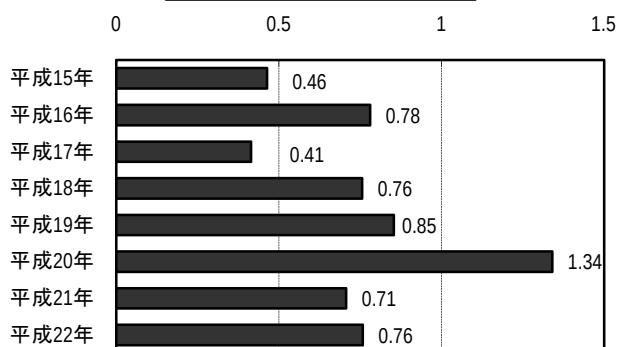
(ケ) 百日咳

平成 22 年の年間報告数は 31 例，定点当たり報告数は 0.76，定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 0.93，前年比は 1.07 であった。

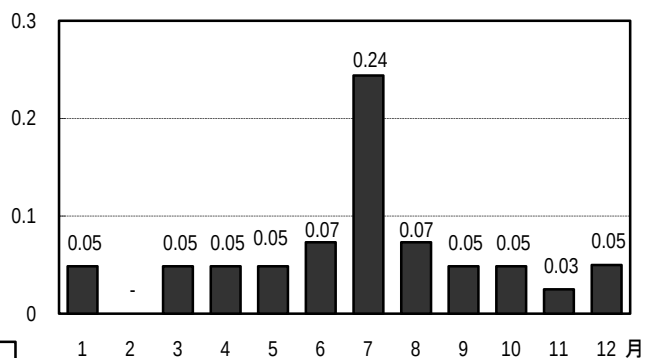
過去 7 年間の年間定点当たり報告数（0.41～1.34）と比べると，平成 20 年，平成 19 年，平成 16 年に次いで多かった。

5 歳階級別では，0～4 歳が 14 例(45.2%)と最も多く，次いで 10～14 歳が 6 例(19.4%)で，小児科定点からの報告にもかかわらず 20 歳以上が 5 例（16.1%）と多くなっている。

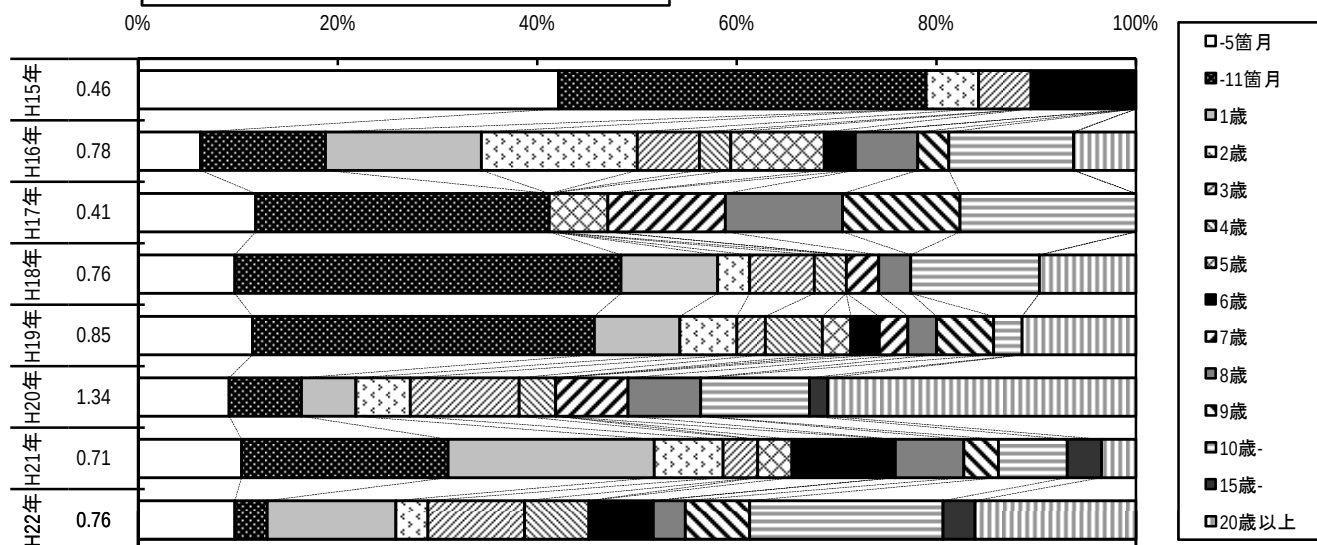
年次別定点当たり報告数



月別定点当たり報告数

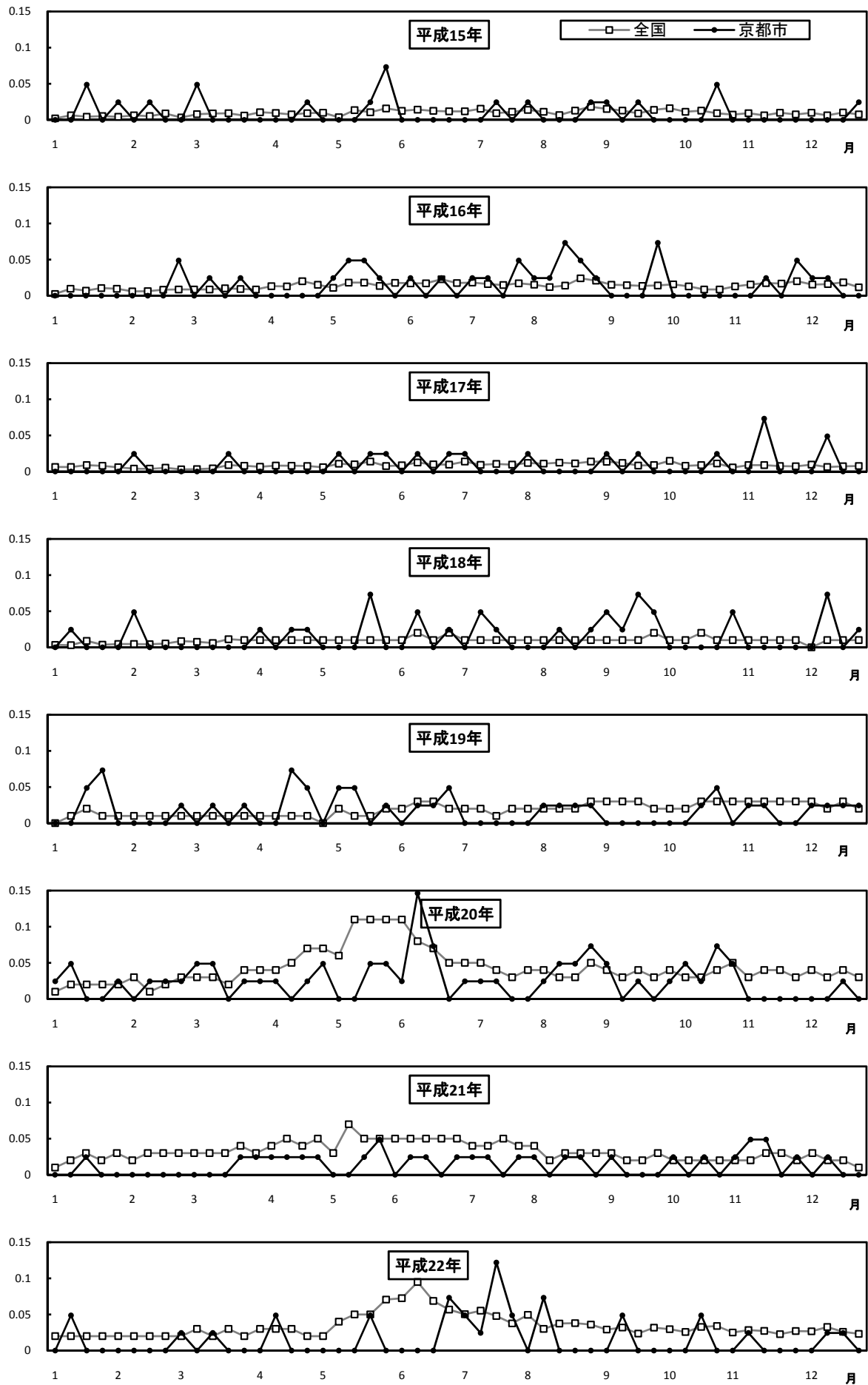


年次別・年齢階級別定点当たり報告数の割合



百日咳

週別定点当たり報告数の推移



(コ) ヘルパンギーナ

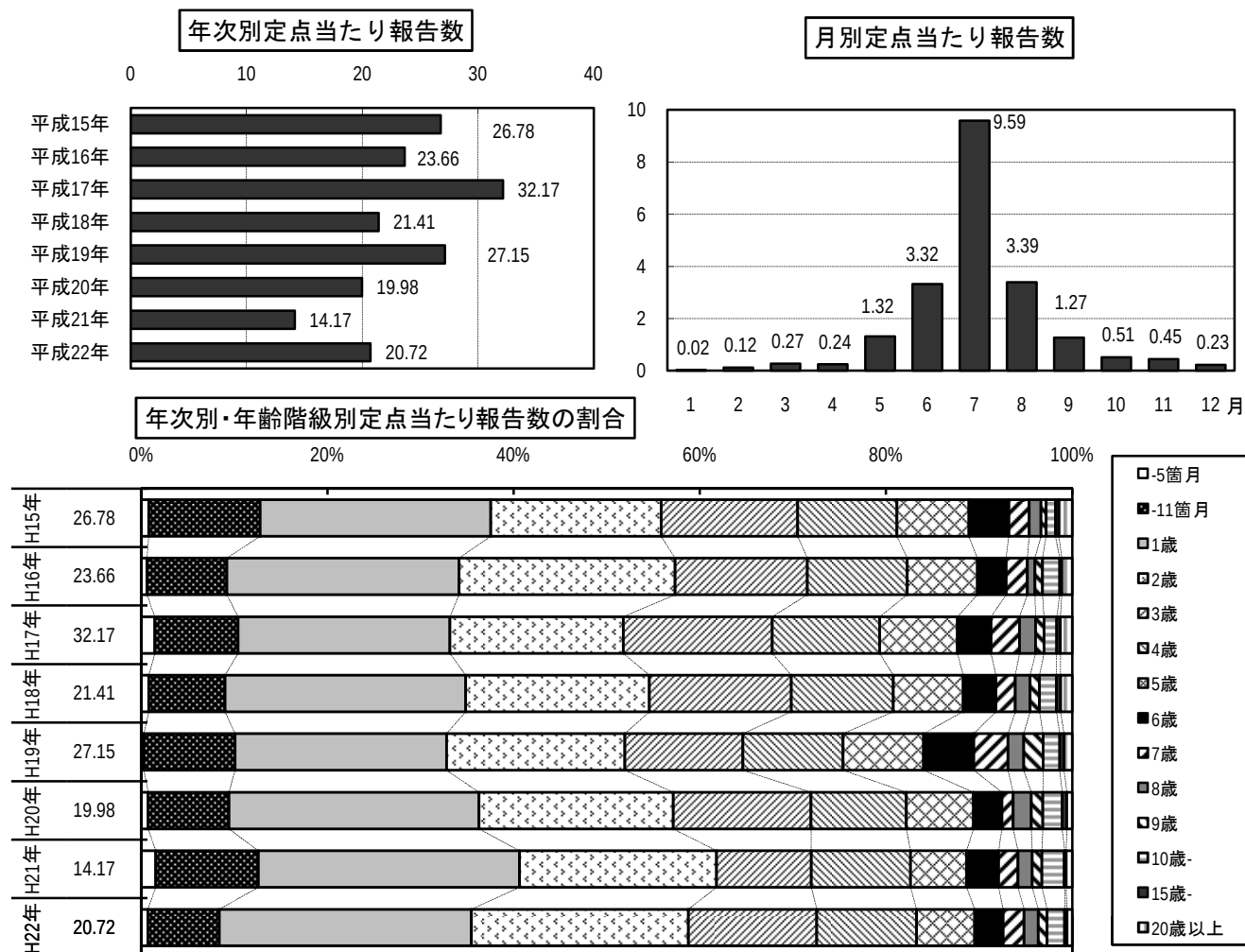
平成 22 年の年間報告数は 849 例，定点当たり報告数は 20.72，定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 0.90，前年比は 1.46 であった。

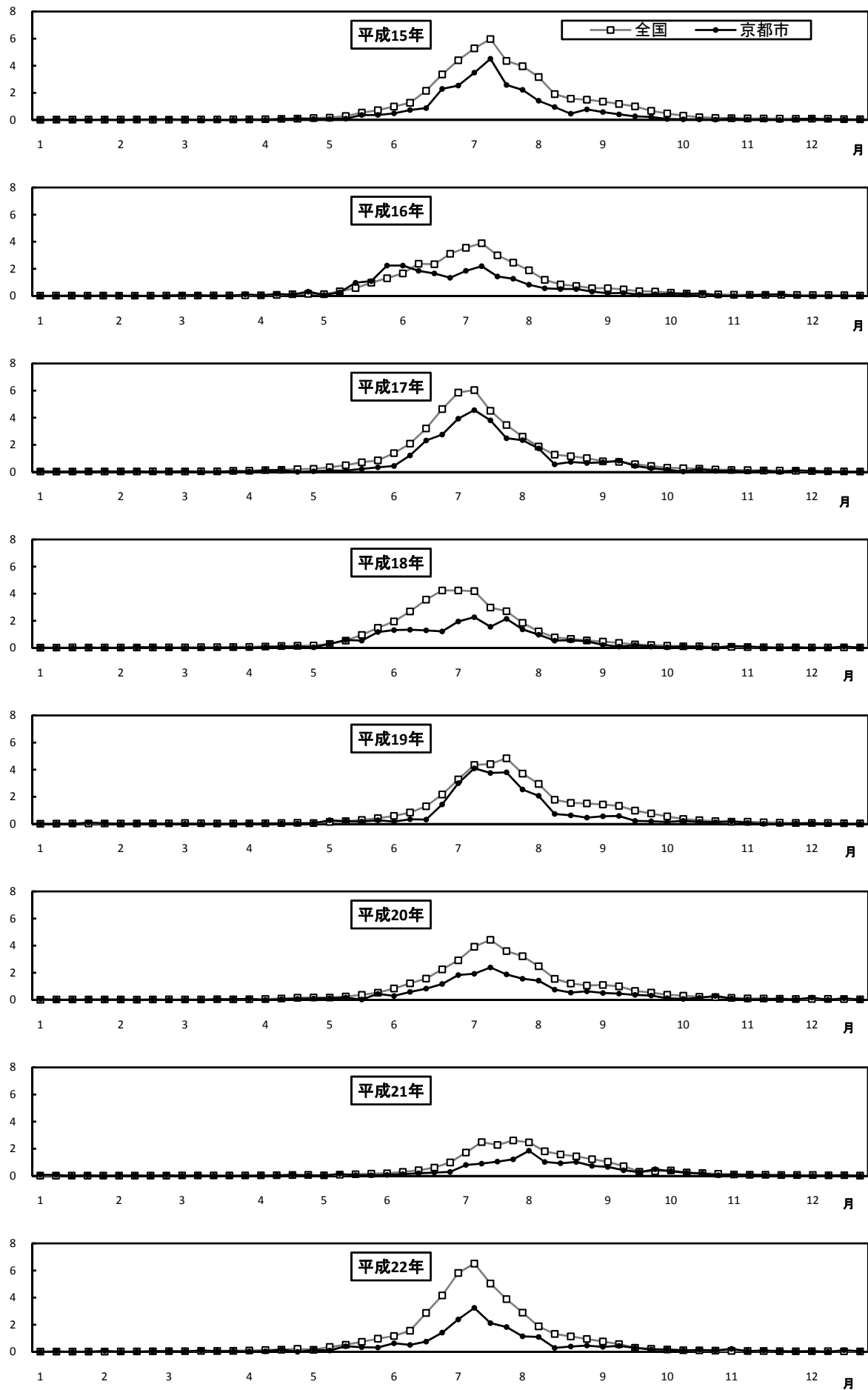
過去 7 年間の年間定点当たり報告数（14.17～32.17）と比べると，平成 21 年，平成 20 年に次いで少なかった。

月別定点当たり報告数は，7 月（9.59），8 月（3.39），6 月（3.32）の順に多く，例年夏季に多い。

週別定点当たり報告数は，第 28 週（7 月）にピーク（3.24）となった。

年齢階級別割合が高かったのは，1 歳（27.1%），2 歳（23.3%），3 歳（13.8%），4 歳（10.7%）の順で，1～4 歳が 74.9%を占めた。





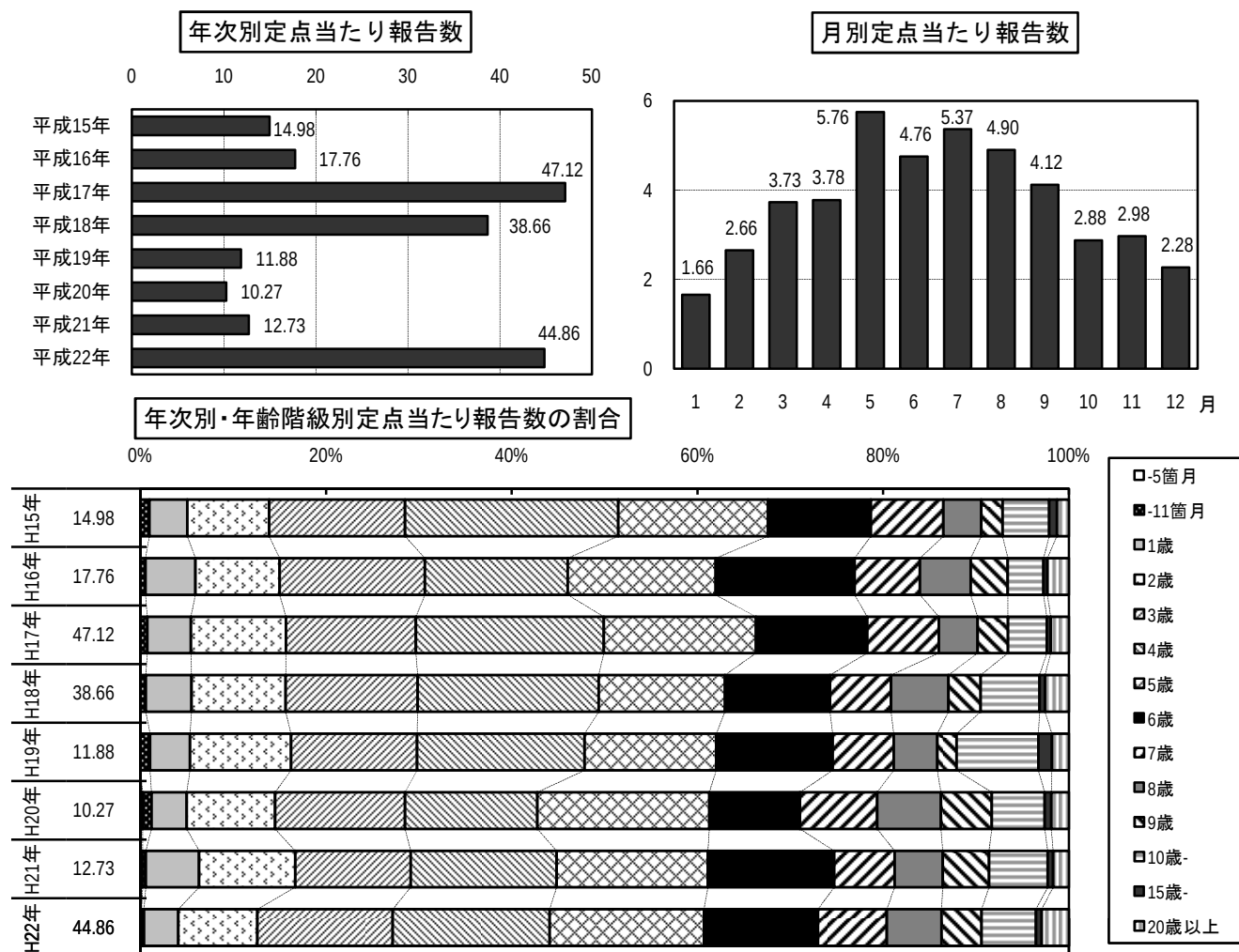
(サ) 流行性耳下腺炎

平成 22 年の年間報告数は 1,834 例、定点当たり報告数は 44.86、定点当たり報告数の過去 5 年平均値との比は 1.86、前年比は 3.52 であった。

過去 7 年間の年間定点当たり報告数（10.27～47.12）と比べると、平成 17 年に次いで多かった。流行性耳下腺炎は、数年おきに流行がみられ、平成 22 年は流行の年となった。

年齢階級別割合が高かったのは、4 歳（16.9%）、5 歳（16.6%）、3 歳（14.6%）、6 歳（12.3%）の順で、3～6 歳が 60.4%を占めた。

詳細は、[患者情報 1](#)（平成 22 年トピックス）「(1) オ 平成 22 年伝染性紅斑と流行性耳下腺炎のまとめ」を参照。



流行性耳下腺炎

週別定点当たり報告数の推移

